

## 学生海外研修の概要とその課題

——平成17年度，愛知県立看護大学生参加による研修の実施報告

片岡由美子

### Aichi Prefectural College of Nursing & Health Study Abroad Tour in the US, Spring 2006 — a Report

Yumiko Kataoka

キーワード：海外研修，語学研修，看護学生，米国大学キャンパスライフ，異文化体験

#### I. はじめに

愛知県立看護大学と米国ニューヨーク州立大学フレドニア校間においては，平成16年に正式に学术交流協定が締結され，それに基づいて行われる学生派遣研修は今回で2回目となる。この間，本学では在学生対象に国際交流に対する意識調査を行い，学生による国際交流と海外の看護情勢への関心の高さが明らかになった<sup>1)</sup>。フレドニア校における研修自体は，交流協定のない時点でスタートした平成11年度から7回を数え，今回は，初めてとなる研修奨学生（渡航費援助）の制度を導入しての実施となった。奨学生選出に当たっては，同制度の認知度の低さからか，または応募条件として英語資格試験の成績の報告を設けたこともあって期待するほどの応募者数がなかったが，意欲のある学生1名を奨励学生として国際交流委員会により選出した。現地の受け入れ側状況（特に宿泊施設事情）により，今回，定員を従来と比べ若干少ない8名と設定し研修を実施することとなった。

研修実施に際して，研修プログラムの向上の目的のため，参加者を対象に本プログラムに何を期待し参加したのか，そして実際研修においてどのような経験をしたかを調査した。

本稿では，今回実施された研修の概観し，上記調査の結果について考察する。

#### II. 研修期間

平成18年3月7日（火）～24日（金） 18日間

#### III. 研修場所

アメリカ合衆国ニューヨーク州

研修キャンパス：ニューヨーク州立大学フレドニア校  
見学施設：

- ① County Home (Nursing Home)
- ② School 3 (Elementary school in Dunkirk)
- ③ JCC Nursing School (in Jamestown)
- ④ Brooks Memorial Hospital
- ⑤ Health Center (on campus)

#### IV. 主な研修プログラム

##### 1) 1<sup>st</sup> Week (3月7日～11日)

- ① Orientation
- ② Hafner学長と面談
- ③ Tutoring (各チューターとESLアクティビティ)
- ④ County Home見学

2) 2<sup>nd</sup> Week (3月12日~18日)

- ① School 3 訪問
- ② Tutoring
- ③ 講義聴講
- ④ Brooks Memorial Hospital 見学
- ⑤ JCC看護学部訪問
- ⑥ Field Trip (Niagara Falls & Outlet Mall)

3) 3<sup>rd</sup> Week (3月19日~24日)

- ① Tutoring
- ② 講義聴講

V. 参加学生

今回研修に参加した学生は1年生3名, 2年生5名(内1名は奨励学生)の計8名であった。

参加した学生の内, 半数の4名にとって, 今回が初めての海外渡航であった。海外経験者の参加者には, 数年に及ぶ海外生活の体験者, 渡航5回目の者等があり, 参加者間に渡航経験に関して差がかなりあった点が今回の研修メンバーの特徴である。

VI. 研修費用

学生の負担した費用は原則的に表1のとおりであった。

学生たちは表1中, ②については表記されたプログラム内容の代金に加え, 他に現地での個人的な飲食代金を含め, 実際合計で平均\$850 (¥97,750)程を現地にて各自清算した。また, 上記金額には週末の自由旅行等の個人的出金は含まれていない。

表1 研修費用

①往復航空運賃 (団体包括割引運賃)+諸税	¥101,500
②現地研修費 (含, 宿泊・送迎・団体行動時の食事代)	(\$800)
	1\$ = ¥115      ¥92,000
計	¥193,550

VII. 研修実施前・実施後に行ったアンケート調査

1 目的

現行の海外研修に関して, 参加希望者のニーズと実際の参加者によるプログラム内容の需用について明らかに

し, 今後の活動における資料とする。

2 調査対象

平成17年度米国研修旅行に参加した8名(1年生3人, 2年生5人)を対象とした。

3 方法

渡航前に予め, 参加者が今回米国研修に参加するに先立って, 本研修に期待すること, 求めていることについてのアンケートを実施し, また帰国後, 実際に研修に参加してからそれらの意識に変化があったかどうかについて同様に回答してもらうことにより検証した。調査実施については学生に直接説明し, 匿名性やプライバシー保護, 調査後のデータ扱いについての倫理的配慮を明記した依頼・解答用紙を用意し手渡した。アンケート用紙の回収は渡航直前, 帰国後にそれぞれ行った。

VIII. 結果

研修参加前の質問については8名から, 研修参加後の質問については7名から回答を得た。研修前の調査結果に関しては図, 表に1)-と記載し, 研修後の結果については2)-と表記した。

1. 研修参加の動機等

今年度の研修参加者がいつ, どの時点でこのプログラムによる研修に参加するかを決めたのかについて尋ねたところ, 「入学して1年以上後」が3名, 「入学して半年後」が2名, 「入学してすぐ」が1名であった。また「入学前」から希望していた学生も2名あった(図1)-1)。

このような学生の研修参加目的として半数の学生が,

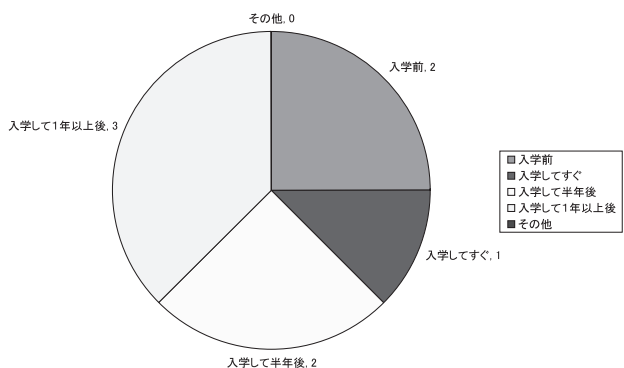


図1)-1 研修参加の決定時期

「医療施設の見学ができるから」、「米国の大学生活を体験できるから」、「現地の学生と交流できるから」を挙げ、第一に看護という自分の専攻に関わる施設見学と共に、米国大学でのキャンパスライフを体験するという研修プログラムの両柱を重視していた。「とりあえず手近なプログラムだった」、「費用が安い」といったプログラムの内容以外の現実的側面はその後に位置しており、参加者の目的意識の高さが伺える（図1)-2)。

一方、あえて他の研修プログラムでなくこのプログラムを選んだ理由については、ほとんどの参加者が「大学が紹介しているプログラムだったから」と答えており、プログラムの実施実績に対する安心感や既参加者の存在が大きな決め手になったことがわかる（図1)-3)。

## 2. 研修プログラムに対する期待と不安

参加学生たちが本研修プログラムに期待する内容は、参加の目的と重なっており、「医療施設の見学」、「米国人学生との交流」を挙げている。同時に「英語力の向上」も半数が期待しており、語学習得を直接的な研修参加の目標に掲げるのではなく付随した効果として英語力の向上を期待している現実が垣間見える（図1)-4)。

その原因として考えられるのが、研修に対して不安に思っていることについて尋ねた際の回答のあり様で、圧倒的にほとんどの学生が研修の不安材料として「言語コミュニケーション」を挙げている（図1)-5)。

## 3. 語学（英語）力について

参加者自身に自身の英語力に関して自己判断しても

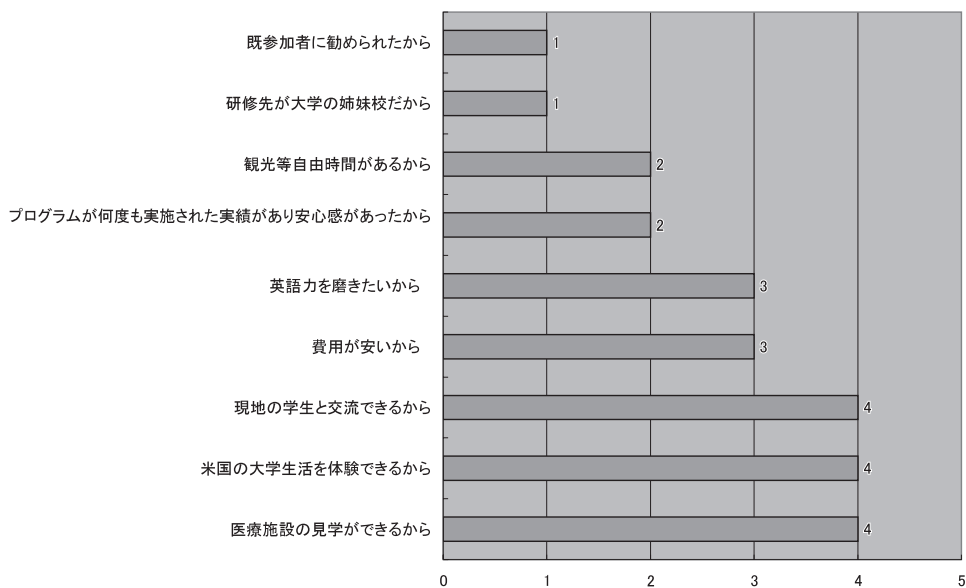


図1)-2 研修参加理由（複数回答）

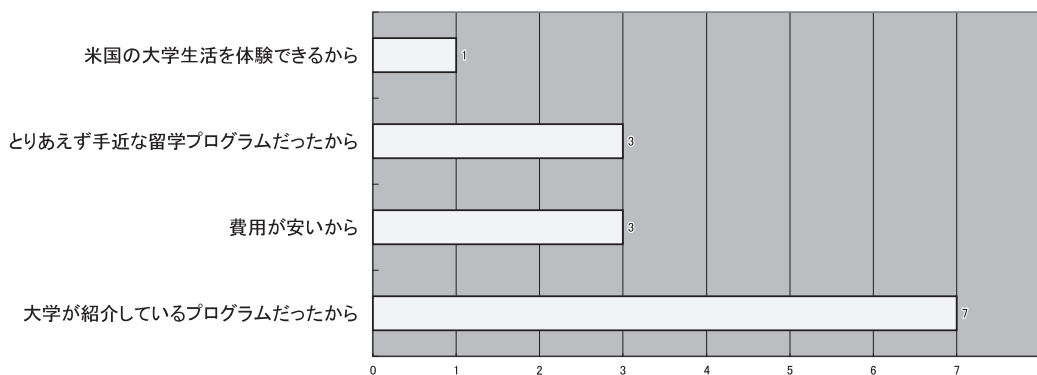


図1)-3 （他の企画でなく）本研修プログラムを選んだ理由（複数回答）

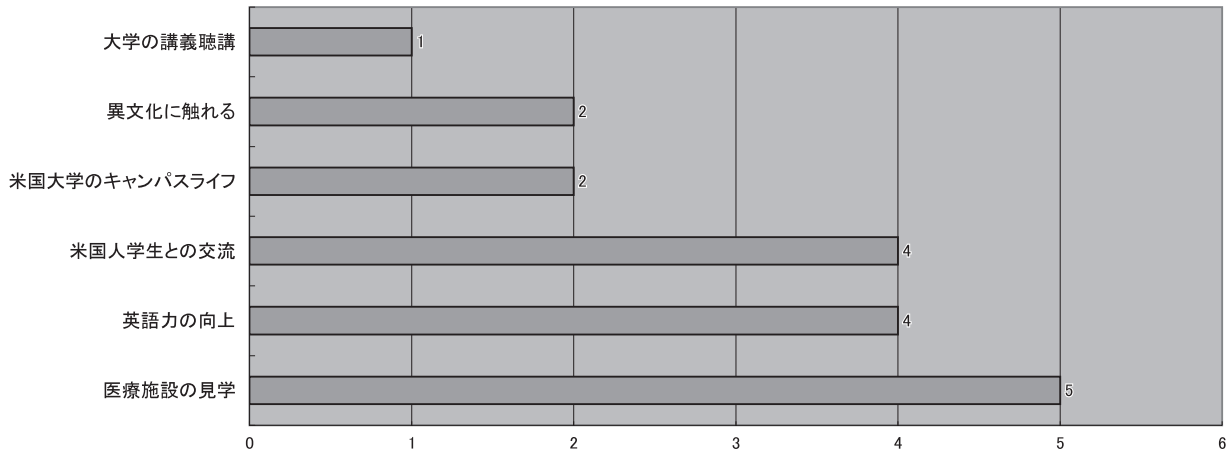


図1)-4 本研修プログラムに期待していること (複数回答)

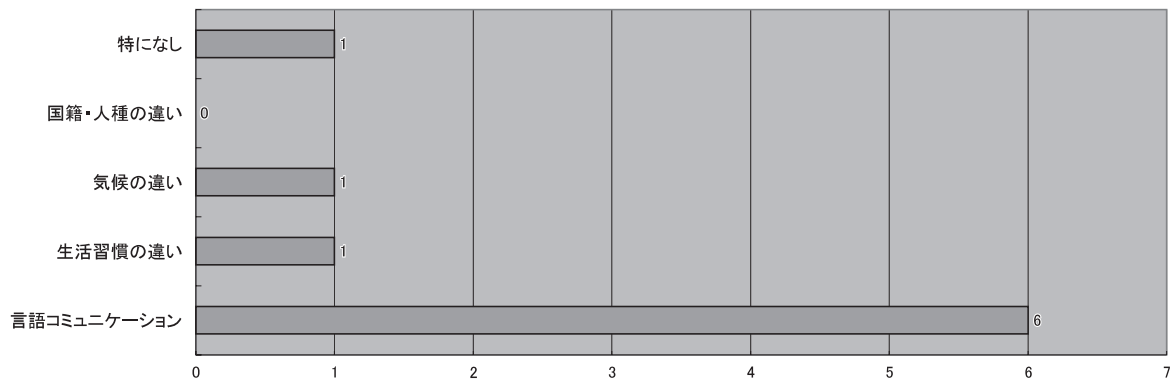


図1)-5 研修に関して不安に思っていること (複数回答)

らったところ、「得意である」と「どちらかと言えば得意な方である」が半数、また「不得意である」と「どちらかと言えば不得意である」が半数と分かれた (図1)-6)。研修参加後の自身の英語力について予想をしてもらったところ、「ある程度は伸びる」と期待をしていた学生が5名で、「あまり変わることはない」と答えたのは2名であった (図1)-7)。

一方、研修終了後に英語力の向上について尋ねたところ、「向上した」は0人であったが、「ある程度向上した」と「少しは向上した」が合わせて5名で、「変わらない」と答えた学生は2名であった (図2)-3)。

#### 4. 研修プログラムの内容に関する感想・意見

研修参加後に、研修旅行で印象に残ったものについて尋ねたところ、半数以上の6名が「キャンパスライフ」、5名が「自由旅行」を挙げており、「医療施設の見学」は2名にとどまった (図2)-1)。

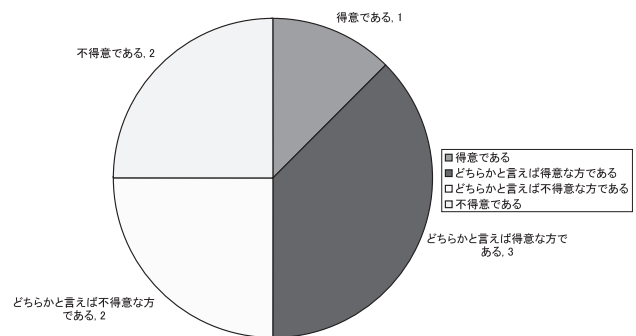


図1)-6 自己判断による英語力について

研修中に困ったことは何であったかという項目に対し、半数以上の学生が「日常生活における言語コミュニケーション」と「見学先での言語コミュニケーション」を挙げており、「食生活」や「生活習慣の違い」、「気候」といった異なる生活環境の適応に対する困難を挙げた者は2, 3名であった (図2)-2)。

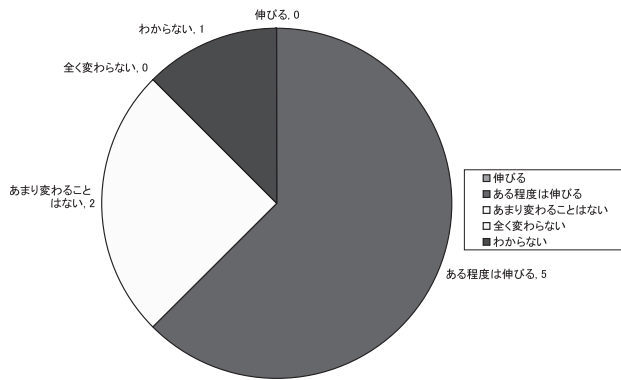


図1)-7 研修参加後の自身の英語力についての予想

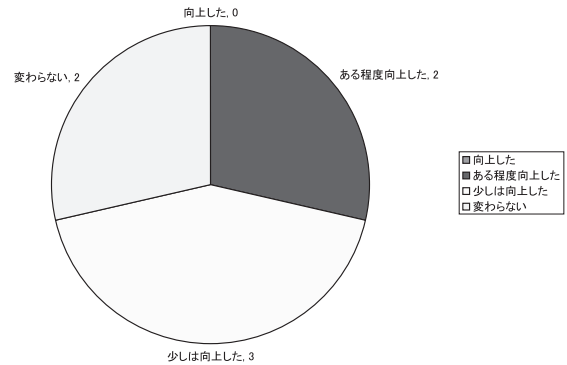


図2)-3 研修後の英語力について

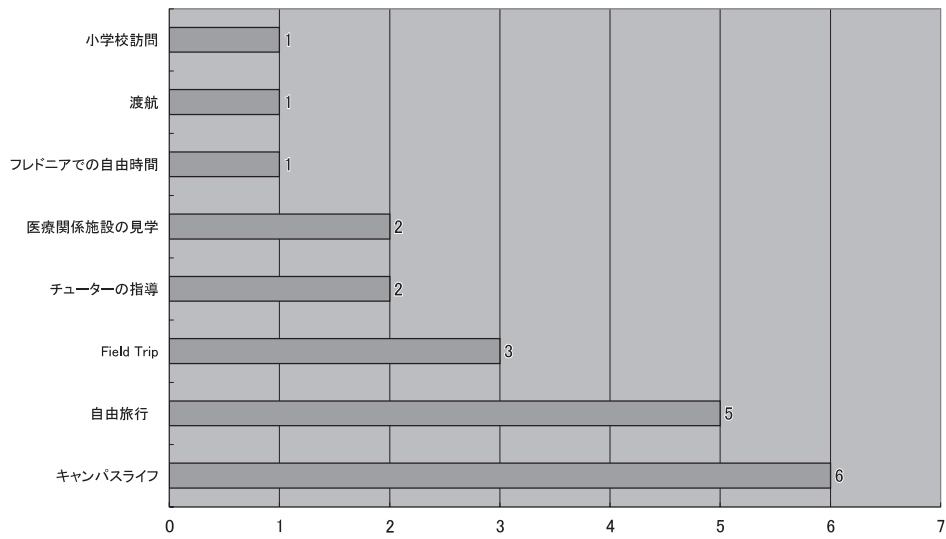


図2)-1 研修で印象に残ったもの

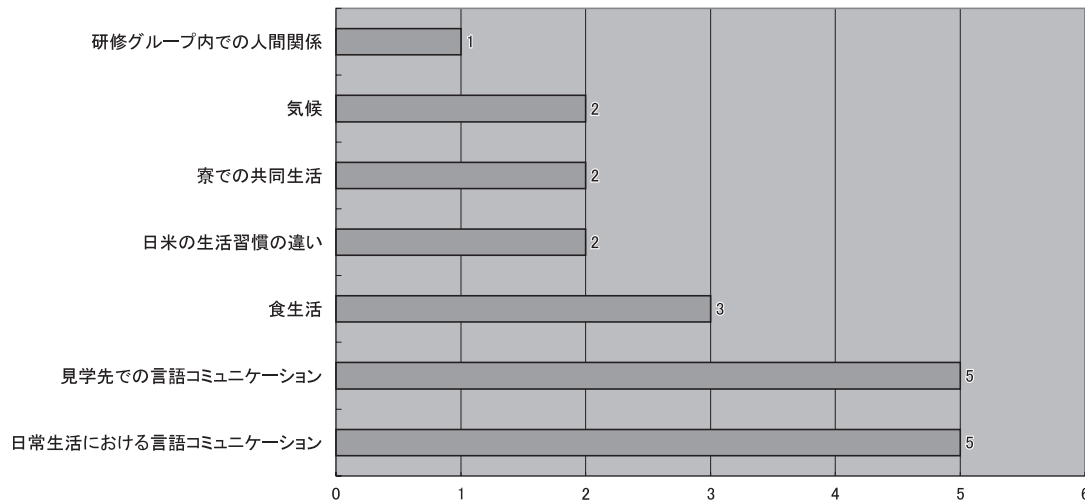


図2)-2 研修中困ったこと

## 5. その他

研修実施前に「期待」していたことは叶えられたかどうか尋ねたところ、全員が「叶えられた」と回答した(表2)-1).

また、感想として、多数の参加者が「異文化に触れて視野を広げることができた」と述べており、「積極的に行動すること」に関する感想も複数名あった(表2)-2).

## IX. 考察

### 1 学生の研修参加の背景について

図1)-1にあるように、大学入学以前に既にこのプログラムの存在を知っていた者が2名おり、このことは今後の大学広報の方策を示唆する点となろう。入学前から海外における研修の存在を認識し、それに対する参加の意思を抱くことは、ひいては入学後の学習意欲、モチベーションの高さが期待できるからである。

では、そのように海外研修を意識して学生生活をスタートした参加者を含め、実際にどんな学生が本研修プログラムに参加しているのかを俯瞰したい。参加者の過去における海外渡航歴をみると、半数(4名)は初めての海外渡航となり、その反面、半数(4名)は複数回の渡航を経験しており、渡航経験の差は2グループ間で大きなものであった。そのため、前者グループは物理的、精神的に渡航準備の段階でかなりのプレッシャーを感じていたようである。

表2)-1 研修実施前に「期待」していたことは叶えられたかどうかについて

	n=7
叶えられた	7
叶えられなかった	0

海外研修というのは、外国語でのコミュニケーションが絶対的に必要である環境に身を置くという状況にあることは明らかではあるが、まず、第一に言えることは、海外での研修に参加を希望する学生が必ずしも外国語(今回の場合は英語)に自信を持っているわけではないという点である。これは図1)-6でも明らかである。今回の参加者の半数は苦手意識を持っていた。これらの学生は語学とは別の興味のために海外への意識・嗜好が高く、研修におけるレジャーとしての側面に期待しているのと同時に、そのためのある程度の語学力の向上をも研修の効果として期待している(表1)-4)。加えて、参加者の半数以上は現地での言語コミュニケーションに不安を抱いていた(図1)-5)。

逆に自身の英語力に自信を持っている学生は、将来的な展望として、青年海外協力隊への参加を希望している者、または米国のRNの資格を取得したいという者等、国外における保健医療活動に対するはっきりとした目的を抱いていた。医療関係に進路を定めた学生による将来における海外での医療活動に対する関心の高さは森尾らの報告にも明らかである<sup>2)</sup>。これらの目的意識が日常の語学学習に対するモチベーションの差として表れてくるのは当然であろう。

特記すべきは、図1)-5に表れるように、学生たちは研修参加に当たって現地の生活習慣の違いや、国籍の違いにそれほど留意をしていない点である。現在の学生は物心ついたときから西洋式的生活スタイルに慣れ親しんでおり、自らの日本人としてのアイデンティティを意識することは日常生活の中で少ない。その一方、日常生活で異文化と接する機会は多くなく、他文化への共感や理解力が欠けているように思われる。自分の国籍や異文化に対する意識のナイーブさが、参加者にどのように自覚されるかという点も、このような研修を実施する上で忘

表2)-2 その他、研修に参加して「何を得たか」という問に対する回答

- ・現地で様々な人とのコミュニケーションを通じて英語においてだけでなく、文化や考え方の違いなどに触れられ、視野を広げることができた(同様回答複数)。
- ・積極性を得られた。
- ・思っているだけでなく積極的に動くことの大切さがわかった。
- ・親元を離れて生活し、親のありがたみがわかった。
- ・寮での共同生活で、協力すること、話し合うことの大切さがわかった。
- ・海外で色々な人に助けられ、今度は日本で自分が外国人を助けてあげられると思う。
- ・英語力が向上した。
- ・日常会話がよくわかり、スラング等を覚えて楽しかった。
- ・日本のことがよくわかった。
- ・日本人は「すみません」とすぐ言うが、アメリカ人は「Thank you」と言う。
- ・参加メンバーと交流できたことが良かった。

れてはならない効果である。

## 2 研修参加の目的に関する学生の意識について

上記のような各々の学生の目的意識の差や、語学に関する得手不得手を問わず、参加者が研修参加の理由として第一に挙げているのは「医療施設の見学」であり(図1)-2), 看護学生として海外研修に参加するに当たって、その目的の一部に自身の専攻に関わる学習としての側面を重要視している。そういった意味で、今後、研修の内容を検討する際に、本学が実施するような「看護学生のための」と銘打つ研修は、あくまでもその第一の目的に、海外における看護・保健医療に関する見聞を高めることを据える必要があろう。

しかしながら、実際に研修を行った後、学生たちが最も印象に残ったものとして「キャンパスライフ」に次いで「自由旅行」を挙げている(図2)-1)。今回の参加学生たちは全員揃って自由行動の週末にニューヨークシティに出かけており、手配や移動、さらには現地での観光を含め、pleasureとしての海外研修の側面が、本来第一目的としていた海外の「医療施設の視察」を凌駕してしまっている。参加学生たちの年齢を考慮すれば致し方ない結果ではあるが、教育機関に関わる研修として、自由時間のあり方や研修そのものの意義が問われるであろう。では海外研修に期待されるその他の側面、例えば異文化体験や語学学習はどうであろうか。

他大学で実施されている海外研修は、そのプログラムの内に現地での語学学習としてESLの講義を受ける時間帯を設けているものも多い。講義担当者は同行する引率教員であったり、現地校におけるESLのインストラクターであったりするが、全行程の中でその時間配分は極々限られており、ましてや看護学生のような特化した目的を研修に組み込んでいる場合は尚更である。そのような状況で行われる現地での限られた語学の講義でどのような効果が期待できるというのだろうか。

本学研修プログラムに参加した者は、研修開始前に問われた英語力について、研修による語学力向上を期待しており、「変わらない」と予想した学生を上回る(図1)-7)。しかしながら、実際研修終了後に同様の内容について問われた際、「ある程度向上した」と「少しは向上した」が合わせて半数以上を占めたにも関わらず(図2)-3)、回答者のうち、元来高い英語コミュニケーション能力を持っていると自己認識していた学生の回答は「変わらない」にとどまった。

実際、医療系(看護・医療技術)海外研修のプログラムに参加した他大学の学生のアンケート調査には、このような研修中のESLプログラムに対して「無意味である」とか「役に立ちにくい」といった、厳しい意見が出されている<sup>3)</sup>。

先に挙げたように、今回の参加学生の半数は自身の英語力にある程度の自信を持っている学生たちだった。しかしながら、それにもかかわらず現地での臨地コミュニケーションに際してはスムーズに行われていないケースが散見された。また実際に、帰国後「(出発前は)『英語くらいしゃべれる』と思っていたけれど、ほとんどしゃべれず、相手の言っていることはわかるのに言いたいことが伝えられなかった」という感想を得た。机上の学習、もしくは教室内で得ていた自信は、実際のコミュニケーションという壁に直面し、改めて現実を知ることになったようである。また、逆に元々英語に関して苦手意識を持っていた学生は皆、臨地でのコミュニケーションを実際に体験して「ある程度」あるいは「少し」の語学力向上を意識している。そういった面から見ても、生活に密接した類の外国語コミュニケーションに関して未体験、もしくは経験不足の学生ほど、自身を取り巻く環境からそれらを学び、吸収した実感を抱くことができたことがわかる。このことから、この種の海外研修で期待される語学学習のカテゴリーは、「既習のエレメンタリーな日常会話をスムーズに使いこなす実践」と捉えるべきであろう。

## 3 参加者の意見から読み取れるもの

今回の研修を含めて、参加者の多くが研修終了後に「何を得たか」という問いかけに対して「異文化に触れて視野が広がった」と回答をしている(表2)-2)。客観的にみれば、それは単なる日米間(もしくは日対西洋間)のカルチャーギャップの一部に過ぎず、決してその背景に存在する米国文化のネガティブな排他主義やキャピタライゼーション、特有の消費社会の現実を理解しているわけではない。それでも参加学生たちが実際に「文化の違い」「考え方の違い」に接して、その事実を知り得た対価は大きい。しかし教育の場で教養科目として異文化をトピックに扱う限り、上記のようなネガティブな情報も提供すべきであることを忘れてはならない。

また、一部の参加者から聞かれた、それまでは意識をすることのなかった、自分の家族を含めた自国の文化に目が向いたという声は、「他者の理解」を通じた「自己の

理解」に及び、このような海外研修を実施する意義を改めて感じさせる結果となっている。

## X. おわりに

今回、多くの学生が研修開始前に、医療施設の見学を含め、自己の専攻である看護に即した見聞を深めることを第一の目的に挙げていた。今後も看護学生を対象にした海外研修のプログラムを検討する際に、海外における看護・保健医療に関する見聞を高めることをプログラム内容の中心に据える必要があろう。その第一目的も含め、出発前に研修に対して抱いていた期待について回答者全員が「叶った」と記したことは、本研修プログラムに対する参加者の好意的な評価と判断できよう。

同時に、すでに指摘をしたように異文化に実際に触れてみることの重要性は明らかである<sup>4)</sup>。学生たちが研修終了後に最も印象に残ったこととして「文化の違い」や「異文化に触れたこと」を挙げている点からみても、海外で生活をして実際に得られる外国語でのコミュニケーションの困難さ、異文化体験のインパクトの大きさは絶対的なものである。そのような意味で、短期の海外研修は語学学習の面で語学研修そのものを目的とするより、「異なった文化に体験し、他者の存在と自己認識を新たにし、さらには実際の外国語による言語コミュニケーションの現実の壁を認識したさらなる学習の意欲づけをする」といった方向性を明らかにすべきだと考える。

最後に、本研修の位置づけに関して考察したい。この研修の参加理由について尋ねたところ、当プログラムが「大学が紹介している」ものであるからといった理由や、「(先輩等)参加者の体験を直接聞いて」「身近なプログラムだったから」といった意見が多数であった(図1)-2, 3)。このことから、専門エージェンシーによる企画を始

めとして、さまざまな海外研修企画商品(看護・医療に特化したプログラムを含めて)が存在するが、学生にとって、実際に海外研修に参加するに当たって安心感と興味を持って選ぶことのできるプログラムとは、結局、大学が関与して実施できるものであるということが分かる。現在のところ、本プログラムは大学が正式に提供できる大学主催の研修制度としての形態をとっていないが、学生にとって必要なセキュリティと内容の充実を図るために、今後制度そのもののあり方を検討する必要があることは確かである。ただし、現在のような形態で実施する研修にもメリットがあり(例えば急なプログラム内容の変更、自由時間等、学生主体の行動における裁量に対する臨機応変な対応が可能である点)、それら両面を加味した議論が望まれる。

この報告書は、平成17年度愛知県立看護大学学長特別研究費の助成を受けて行った調査により作成した。ご協力をいただいた大学に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 濱畑章子他 看護学生の国際交流に関する意識調査 愛知県立看護大学紀要, 10, 28-29. 2004
- 2) 森尾郁子他 国際交流に関する歯学部学生の意識調査 日歯教誌 16(2), 13-17. 2001
- 3) 園城寺康子他 看護学科における英語教育のニーズアナリシスとカリキュラムへの示唆 平成13年度~15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書 98. 2004
- 4) 濱畑章子他 看護学生の国際交流プログラム開発へ向けた活動と課題 愛知県立看護大学紀要, 9, 13-19